

(別紙2)

審査の結果の要旨

氏名 松倉 昂平

本論文は、福井県嶺北地方とその周辺の92地点で筆者が実施した現地調査と先行研究に基づき、各地域のアクセント体系の記述を行うとともに、同地方内でのアクセント体系の分布や通時的発達過程を考察したものである。

導入部の1,2章では調査地域の概要と研究史上の本研究の位置づけを述べ、方言区画と、発音や活用などアクセント以外の方言特徴を概観する。3章から8章までの第I部では、各地点の調査結果を、アクセント分類上の基準となる2拍名詞の音調を元にまとめ、三型アクセント、二型アクセント、無型アクセント、(式の対立のない)多型アクセントの4種の体系の存在と分布を示した上で、石川県加賀市塩屋町と山中温泉中津原町の多型アクセント、福井県あわら市浜坂、あわら市北潟、坂井市三国町安島、福井市鮎川町の三型アクセント、あわら市清滝、坂井市丸岡町山竹田の二型アクセント、今立郡池田町西角間の準多型アクセント、南条郡南越前町河野と南越前町大谷の多型アクセントを順に詳述した。9章から12章までの第II部では動詞活用形と複合語のアクセントにつき各方言を横断的に考察し、アクセント体系の地理的分布と発展過程を論じて、全体を総括している。嶺北地方の方言アクセントには、単語の長さに対応してアクセントの対立型が増える多型アクセント、文節数に関わらずアクセント型が3または2種類を超えない三型および二型アクセント、アクセントによる対立を持たない無型アクセントという4類型が存在することはすでに知られていたが、本研究はその分布を多地点調査による言語地図の形で初めて明らかにした。

研究方法においては、面接調査によって自らデータを収集した上で日本語方言アクセントの先行研究を踏まえて分析していることは勿論であるが、7章における韻律脚構造の措定、11章後半の所属型が不規則に変化している語群への語彙拡散理論の適用など、言語理論を応用して観察を解釈することに成功している。9章の動詞活用型に広く見られる不規則性の説明においては類推変化を効果的に用い、10章の複合語アクセントにおける不規則例の説明においては中世のアクセント史上の変化と関連づけ、11章前半では福井平野周辺に圏分布が見られて比較方法に基づくアクセント変化が言語地理学でも裏付けられることを示すなど、歴史言語学の方法も縦横に活用している。本論文の結論においては、福井県嶺北地方の諸アクセント体系が圏分布をなしていることを初めて指摘したこと、動詞活用形のアクセントにおける共通改新に基づいて福井県嶺北地方の諸アクセント体系が一つの祖体系から生じた可能性を系統樹とともに提示したことが注目される。

福井県嶺北地方のアクセントは以前から研究されてきたが、多くの体系が曖昧とされ十分な記述や解釈が行われてこなかった。本論文は調査による記述と言語理論による分析、および史的再建と言語地理学による新たな解釈を提示することに成功しており、学術上高い価値が認められる。以上の理由から、本論文を博士(文学)の学位に値すると判断する。